

## 38. 湖北地方の 縄文時代遺跡

従来 遠方からの流入品として、あまり重視されていなかった縄文時代の低地性遺跡が、近年西日本においてその発見例が増加しつつあり、その重要性により目が向けられてきている。湖北地方においては、湖北町尾上地先の湖底遺跡、米原町入江内湖遺跡等著名な低地性遺跡が存在する。最近、これらに加え、新たな資料を得ている。断片的ではあるが以下に紹介しておく。(図1・2)

### 1 余呉町柳が瀬断層崖出土縄文式土器

低地性遺跡ではないが、余呉町柳が瀬の余呉川東岸、柳が瀬断層崖から小片ばかり5点が採集された。周辺はV字谷で、平坦地は見当らず、また、旧北陸線付近で、出土状態にはやや難点がある。ともかく、5点は厚さ約1cmの厚手のものと0.5cmの薄手のものがあり、厚手のもののうち2点に斜縄文が認められる。およそ中期頃のものであろう(図3-1・2)。

### 2 余呉湖湖底出土縄文式土器

余呉湖北辺の湖岸(現水田)から湖中にかけて、以前から埋没林の存在することが知られていたが、このたび、渇水対策事業による水位低下を想定し、湖底埋没林保護のための護岸堤工事が実施された。その際、埋没林1本が護岸堤下に埋もれることになったため、サンプリングを兼ねて引き上げられた。

ここで紹介する資料は、引き上げの時に、埋没林に付着していた泥土中であつたもので、余呉湖底にも水底遺跡が存在



図1 柳ヶ瀬(A)、余呉湖底(B)遺跡位置図

していたことを初めて明らかにしたものである。土器片は2点あり、うち1点は深鉢型器で、黒褐色を呈し、堅緻で、胎土に雲母片、砂粒を含んでいる。文様は、三本単位の沈線を配する構成である(図3-3)。これは、滋賀里I式あるいはII式に認められる文様構成で、およそ晩期初頭に比定できる。他は、施文はないが、外面にアナグラ属の二枚貝による条痕が見られる(図3-4)。二枚貝による条痕を施す手法は、滋賀里II式以降に認められるといわれ、前者と同様の時期のものであろう。色調・胎土・焼成とも前者と同様である。埋没林引き上げの折りには、これら土器片とともに、クルミとトチの実が出土している。クルミに成熟していないものがあり、トチの実に厚い果皮があるところから、当地に繁茂していた可能性がある。

### 3 近江町法勝寺遺跡出土縄文式土器

法勝寺遺跡は白鳳時代から平安時代にかけて存続したとされる寺院跡で、その下層には古式土師器を出土する包含層の存在が確認されている。最近、倉庫建設に伴う事前調査を実施したが、この包含層付近より、縄文式土器片が4点出土した。いずれも胎土に砂粒を含み、堅緻で、うち3点に、長径8mm、短径3~4mmの大粒の楕円形押型文が施されている(図3-5~7)。



図2 長浜市内縄文時代遺跡(1~9・表のNo.に一致)、法勝寺遺跡(A)位置図



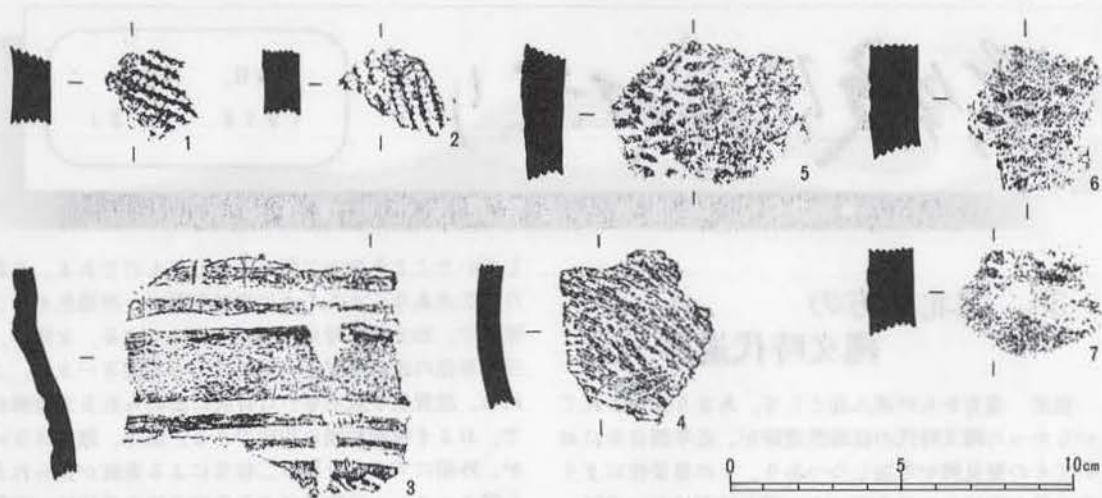


図3 湖北地方出土縄文式土器(1・2-柳ヶ瀬、3・4-余呉湖湖底、5～7-法勝寺遺跡)

これは和歌山県田辺市高山寺貝塚を様式とする高山寺式の特徴で、早期前半のもので、湖北地方のこの時期のものとしては、これに先行する横位密接施文の山形押型文土器を出す尾上湖底遺跡が知られているにすぎない。

(以上、これら遺物の鑑定を平安博物館渡辺誠氏に依頼した。ここに記して謝意を表します。)

(田中勝弘)

#### 4. 長浜市内の縄文時代遺跡

長浜市内における縄文文化の初現は、和歌山県中期初頭の鷹鳴式土器を出土した川崎遺跡(字坂田町地区)十里町遺跡(字丁の町・西尾地区)に求めることができよう。これらの土器は、いずれも細片であり、いずれも頸部に半月状の瓜形文を施すものである。しかし、これら中期初頭と認められる遺物は絶対数が少なく、両遺跡においても各1点、計2点を数えるのみである。

次に中期後半頃のものと思われる土器が比較的まとまって出土した柳町遺跡(図4)では、口縁部に横長楕円で区画した内部に綾杉文、その下位に下垂文を、

磨消縄文の技法と棒状工具による沈線で施す深鉢等が知られている。

後期に入ると、川崎遺跡(字坂田町地区)において浅鉢の口縁部が1点知られる。また、時期は不明であるが後期頃のものといわれる両頭石斧(独鈷石)を出土した山階遺跡を挙げておく。この石斧は黒色粘板岩製のものであるという。この類の石斧は西日本では極めて類例が少ないといわれ、県内においても他に木内石亭旧藏品中に高島郡の山中にて出土したといわれるものが1点伝わるのみである。

晩期に入ると遺跡数も土器の出土量も格段に増加する。遺跡としては十里町遺跡(字八の坪・十五町両地区)、川崎遺跡(川崎町字坂田町、口分田町字南長屋両地区)、宮司遺跡(宮司町字東谷寺)の計5ヶ所を数える。また、これらの遺跡から出土した晩期土器のほとんどが東海地方における晩期後半期にその主体がおけるようで、形態および手法上の特徴により、それぞれ同地方の五貫森式から馬見塚式、樗王式に至る各形式に相対的に位置付けることが可能である。すなわち、

長浜市内縄文時代遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	年代	遺物	調査等	文献等
1	山階遺跡	山階町	後期?	両頭石斧(独鈷石)	江戸天保年間井戸掘削中地下2～3mの粘土中より	『改訂近江国坂田郡志巻一』 『滋賀史蹟調査報告書第一冊』
2	十里町遺跡	十里町字丁の町西尾	中期初頭	鷹鳴式土器1、他1	S.13年地元住民表採	『改訂近江国坂田郡志巻一』
3	"	" 字十五町	晩期	五貫森式相当 壺・深鉢	S.51年市教委調査 自然水路埋土中	調査報告書近刊
4	"	" 字八の坪	晩期	五貫森式相当 深鉢・浅鉢	S.52年市教委調査 自然水路埋土中	整理中
5	柳町遺跡		中期	深鉢	S. 年建物基礎工事の排土中より 地元住民採取	資料報告予定
6	宮司遺跡	宮司町字東谷寺	晩期	五貫森-樗王式相当の 深鉢・浅鉢	S.51年市教委調査 自然水路埋土中	調査報告書近刊
7	川崎遺跡	川崎町字坂田町	中期初頭 後期	鷹鳴式土器1 馬見塚-水神平式	S.45年市教委調査 自然水路埋土中	『国道8号線長浜バイパス関 連遺跡調査報告書』
8	"	口分田町字南長屋	晩期		S.52年市教委調査 自然水路埋土中	整理中
9	森遺跡	森町	?	へら描沈線文を施す 土器片2	S.13年県道(現国道8号)工事中 地下1.5mにて地元住民採取	『改訂近江国坂田郡志巻一』

川崎遺跡(川崎町字坂田町地区)からは、太い突帯に広く深い圧痕文をめぐらした、明らかに馬見塚式の特徴をそなえた土器のほか、内傾する口頸部の外面に粗い条痕を斜位に施す壺式の土器を出土している。

十里町遺跡(字八の坪地区)(図5)では、①(図5-1)は深鉢であるが、細目で稜の鋭い突帯に連続刺突文をめぐらし、五貫森式の特徴を有する。また、②(図5-2)は、口縁部および胴部との境に2条のやや太めの突帯をめぐらす。五貫森式の特徴である。また、この土器は、2条の突帯間の空間に不定形の波形の沈線文を施す。③(図5-3)は、やはり深鉢であるが、口縁部および胴部との境に稜の鋭い突帯をはりつけ、それぞれ連続刺突文をめぐらす。同じく五貫森式に相当するものと思われる。④(図5-4)は、太めの突帯に深く広い押圧文を施し、馬見塚に相当するものと思われる。以上の土器は、いわゆる粗製土器に属するものであるが、このほかに精製土器に属するものも出土している。⑤(図5-5)は、浅鉢形の土器であるが、外面口頸部近くに肉の厚い浮線網状文を施す。胎土は前者に比して緻密であり、つくりも丁寧であるが、器表面は特に研磨された痕跡は認められず、ざらつく。半精製とでもすべきであろうか。色調は褐灰色を呈する。馬見塚出土のものに類似品が認められる。

十里町遺跡(字十五町地区)(図6)のものは、⑥(図6-16)が口縁部にむかうに従って径が小さくなる壺形土器である。口縁部および胴部との境に2条の突帯がめぐり連続刺突文を施す。色調は黒色を呈し、板状の工具で粗く器表面をかいているのみであるが、

光沢を有する。口縁部および胴部との境に突帯をはりつけ連続刺突文を施す。五貫森式に相当するものと思われる。

宮司遺跡(宮司町字東谷寺)(図6)では、⑦(図6-6)が、細くて稜の鋭いはりつけ突帯に連続刺突文を施す。五貫森式に相当すると思われる。⑧⑨(図6-3・4)、⑩⑪⑫⑬(図6-8~11)は、太めのはりつけ突帯をめぐらし、指による広く浅い押圧文を施す。馬見塚に相当するか。以上の粗製土器と共に十里町遺跡(字八ノ坪地区)同様精製土器が出土している。⑭⑮(図6-14・15)は、浅鉢である。器表面は研磨され黒色を呈する。八の坪地区同様浮線網状文を施すが、前者に比して施文方法がやや退化しており、沈線をめぐらすことにより網状文を浮き上がらせる手法をとる。

川崎遺跡(口分田町字南長屋地区)(図5)のものは、胎土が非常に粗く、器表面に斜方向の粗い削条痕を有する砲弾形の深鉢が出土している。このほか、壺形と思われる土器(図5-6)が出土している。胴部外面には磨消縄文の技法に、同心円状の沈線文を施す。胴部と頸部との境には直線の沈線をめぐらし、その直上方に連続刺突文をめぐらす。

これまで市内で発見されている縄文時代遺跡9ヶ所は、すべて標高100m以下の地点に分布する。現地表面高度が最も高い山階遺跡で98~99m程度で、他は88~95mの高度に立地する。これは、姉川の沖積作用で形成された長浜平野では標高100mの等高線が扇状地の扇端の下限とされており、これらの遺跡はすべて三角洲性の低湿地中に立地するということである。この事

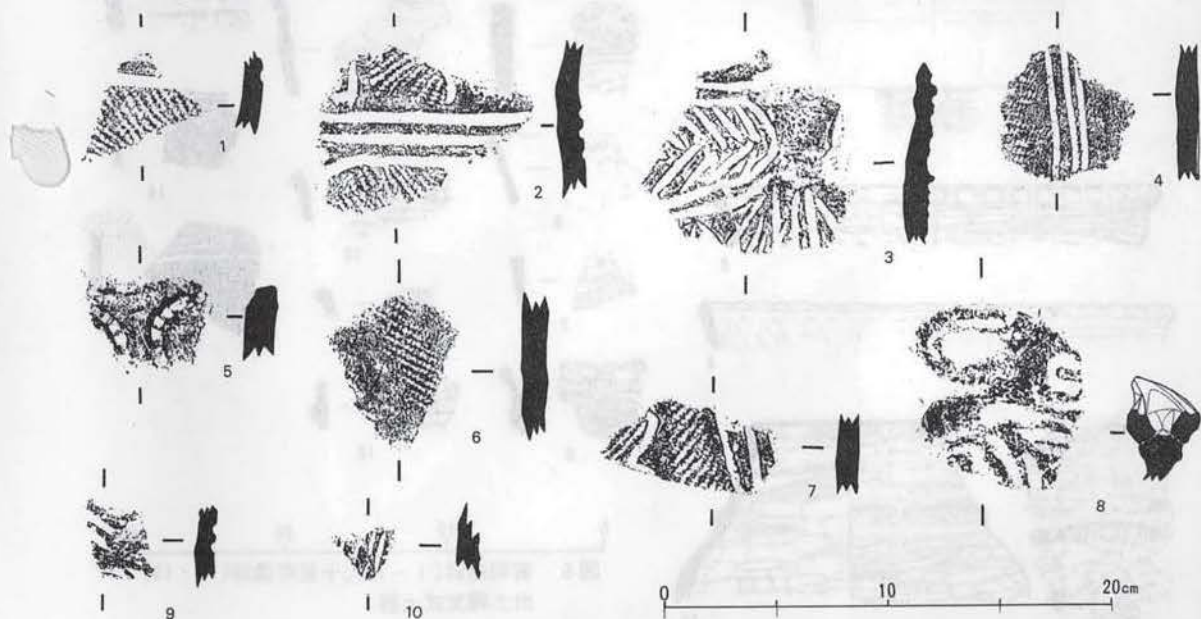


図4 柳町遺跡(1~10)出土縄文式土器



は、湖北地方における他の縄文遺跡と比較した場合、その立地条件が著しく相違することが認められる。すなわち、浅井町醍醐遺跡が標高約 198m、山東町番の面遺跡が 175～185m、伊吹町杉沢遺跡が 180m、同高番遺跡が 160m、同伊吹遺跡が 300m、木之本町川合遺跡が 200m 付近、同古橋遺跡が 130m 等その他の遺跡も含めてそのほとんどが山麓、丘陵部、扇状地上

に立地する。この立地条件の相違と従来の遺物の少なから、長浜平野においては、縄文文化の定着はなかったとするのが大方の意見であった。しかし、この数年来の調査等により遺物の発見が、特に晩期については増加しており、長浜平野における縄文文化の定着については、生産基盤の問題も含めて新たな観点で見直さなければならないものと思われる。(宮成良佐)

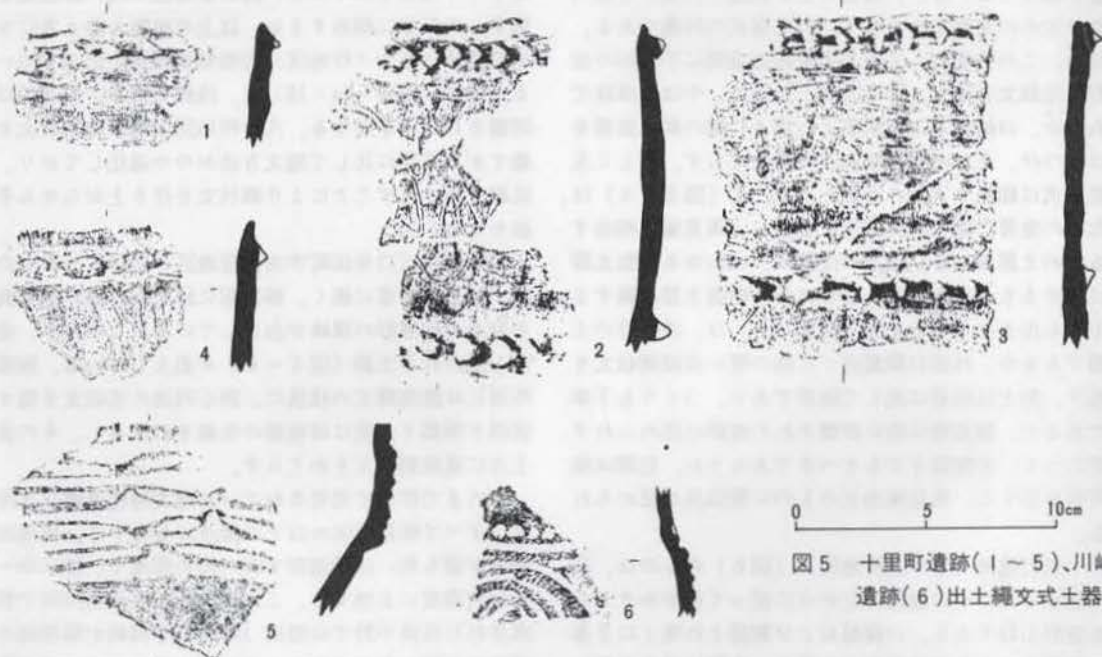


図5 十里町遺跡(1～5)、川崎遺跡(6)出土縄文式土器

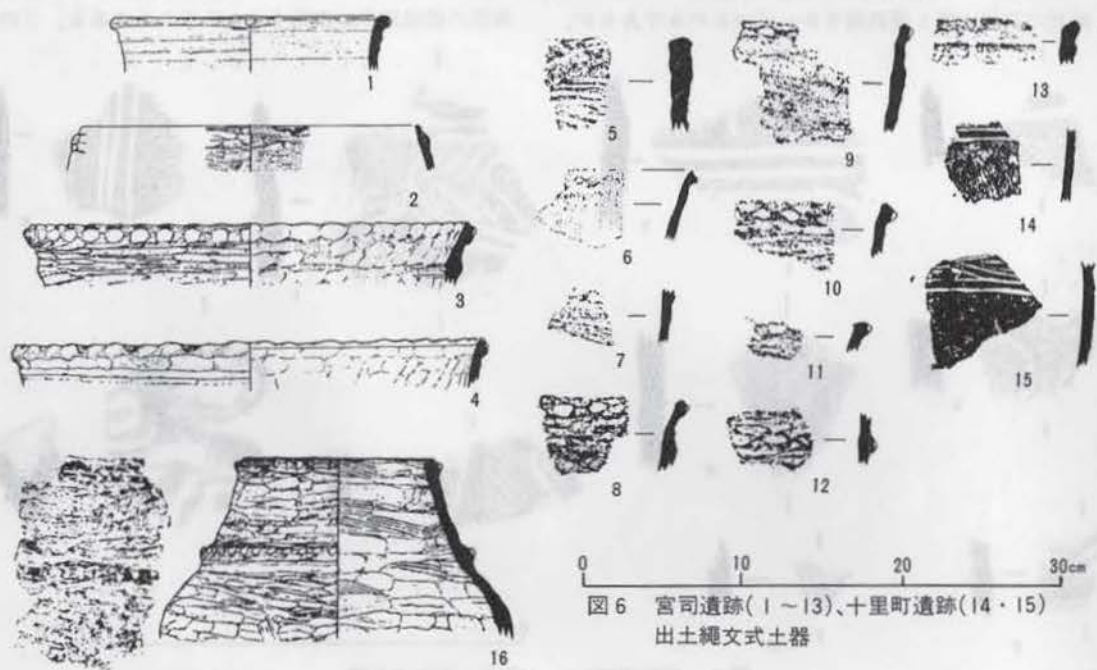


図6 宮司遺跡(1～13)、十里町遺跡(14・15)出土縄文式土器